

カスタムナイフメイキング講座

シース作り（山内清貴氏指導による）

1. 道具

シース作りに必要な道具から紹介します。

これらは、レザークラフトのお店や、東急ハンズなどにあります。



まず、必須なのが、革包丁です。革を裁断します。片刃になっています。細かい箇所や、カーブに使うには、一回り小さく、刃が斜めになったものもあります。自分の使いやすい大きさ、形を考えて、自分で作ってもいいでしょう。



次がステッチレットです。縫い目を等間隔に目印を付けるものです。歯車みたいな物をころがして、使います。間隔によって、3種類の歯車がついていますが、シース作りには一番粗いものを使います。



菱目きりです。下は、手で使う物、上は、ボール盤につけて使う物です。ステッチレットで目印を付けた後、手で、ガイドになる菱目をあけます。そのあと、ボール盤につけた菱目きりで、しっかり穴を通します。ボール盤は回転させずに、レバーで押し込むだけです。



袋シースなどの薄物を作るときには、手縫いパンチを使います。平目と菱目がありますが、平目は革レースのかがりをするときを使うものです。間違えないようにしましょう。

手で挟むだけで、簡単に菱目があきます。



上は、革のへりを丸くするへりおとしです。90度に対して45度の角度で面取りします。もっと丸くしたいときは、30度と60度の2回面取りします。

下は、革を曲げる箇所の裏側に溝をほる、グルーバーというものです。手前に引いて使います。



グリップバイスです。

挟むところが平らに、広がっています。

頭の小さい物は、ホームセンターで 780 円ですが、これは関市の日の出商会で 4000 円くらいです。

2 . 材料

革

牛革を使います。普通サイズのシースで、4.5 mm厚、袋シースで、3 mmか 2 mmを使います。ウェットフォーミングして堅くするため、タンニンなめし、サドルレザー、多脂革などを使います。クロムなめしなど色つきの物は使いません。タンニンなめし（タンロー）が安くおすすめです。一匹の半分で 240 デシ（1 デシは 10cm 四方）、安いところで 16,000 円くらいでしょう。タンローは、手や足の部分まで含まれているため、シースに使えないところもあります。多脂革は、品質の悪いところを捨て、四角くしてあります。その分値段が高くなっています。（1 デシ 120 円くらい）

革は、厚さで値段は変わりません。表は一枚しか取れないからです。

中子

中子には、シースと同じ革を使ってもいいですが、中子用の革もあります。成牛の革のうち、表だけを薄く剥いだ残りのところです。革の粉を固めた、板みたいに硬いものもあります。こちらは、手に入りにくいかも知れません。

接着剤

接着剤は、ゴム系のものを使いますが、よくある、ボンド G 2 1 でなく、プロ用のエバークリップがおすすめです。革の接着に最適のように作ってあるので、接着強度が違います。専門店で手に入ります。

染料

革を染めるには、染料を使います。水で薄められる、クラフト社の WA 染料が良いでしょう。焦茶、茶、黄茶、などがあると良いでしょう。

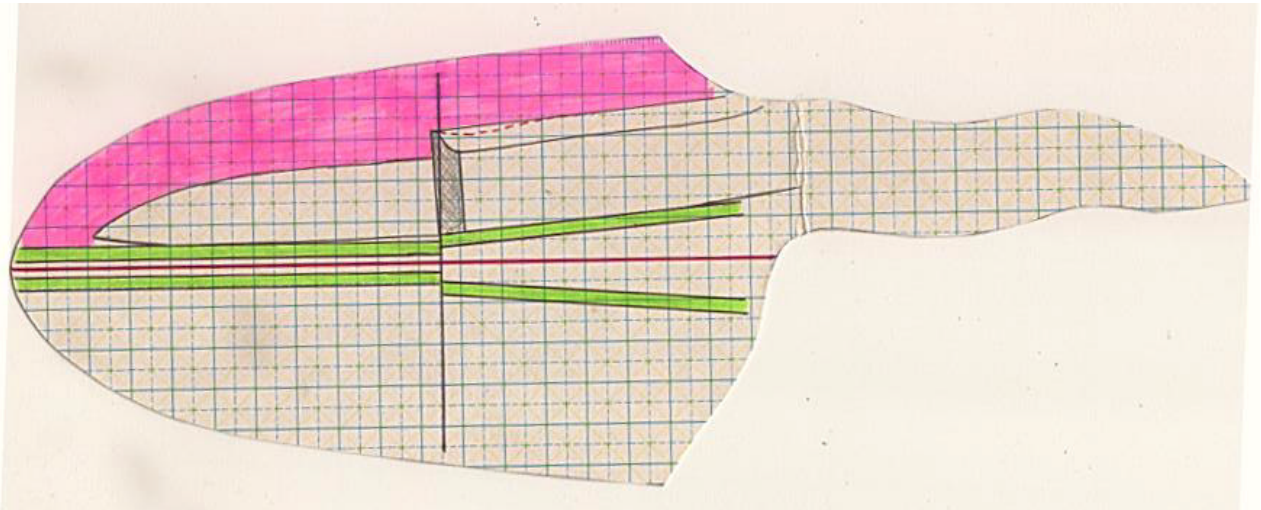
オイル

完成したシースの表面には、オイルを薄く塗っておきます。完全に乾燥してから、液体のミンクオイルを手で塗ります。塗りすぎると、中まで染み込んで、革が柔らかくなってしまいます。程々にしておきましょう。

3 . ラブレスポーチタイプの作り方

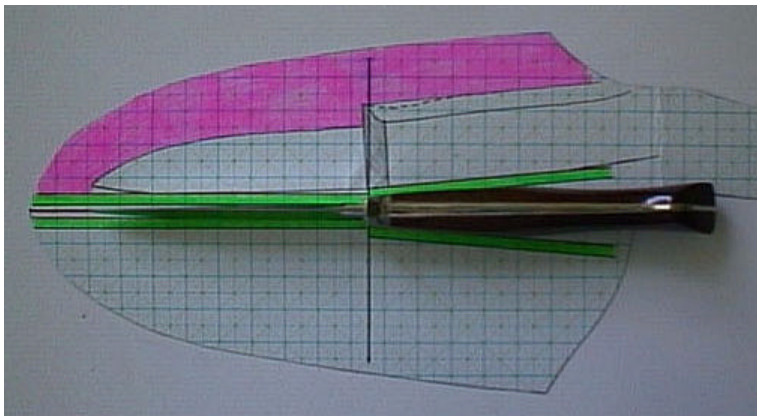


型紙作り

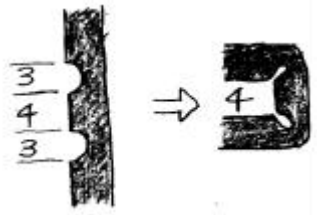


上の型紙が基本です。この型紙を基本に、それぞれのナイフに応じて、微修正して型紙を作っていきます。右利きで、右腰にぶら下げる場合、こちら側が革の裏側になります。

型紙は厚手の紙で作ります。工作紙という、方眼目の入ったものが文房具店などにあります。センターライン(上の図の赤い横線)を引きます。次にナイフの収まる位置を決め、ヒルト位置にセンターラインと直交するラインを入れます。



センターラインを中心に、中子の厚みを取ります。
中子の厚みから外に溝幅 3 mmを取ります。(図の緑部分)

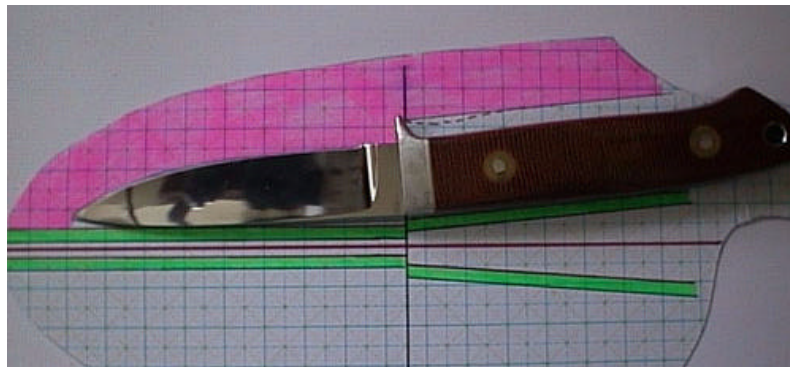


この溝は、左の図のように、革を折り曲げるときに必要です。

ハンドル部は、一番厚みのある場所と、ヒルト先端を直線でつなぎます。

溝幅 3 mm を取ります。

次は中子の内側ライン決めです。ハンドル部のラインに沿って下の図のようにナイフを置き、ヒルト先端の位置を決めます。



ヒルト先端とハンドル部のラインに平行な線を引きます。これが中子の内側になります。ピンクの部分が中子の形状になります。

ナイフをシースに納めたとき、最後にストーンという感触を作るために、ヒルト近くを内側にふくらませます。程度は好みです。硬すぎてナイフが収まらなくなっても、溝掘りのグルーバーで削ることができます。

ベルトループの位置を決めます。ベルトループの縫い目と中子の縫い目が干渉しないようにします。

シース型紙の外形を確認します。今回は、あらかじめできあがっているものを使いましたが、ここではじめて外形を決めても良いです。縫い目は外形から 6 mm ないし 8 mm 入ったところです。そこからさらにナイフ外形まで 5 mm 程度の余裕を取ります。

革の切り出し

革の裏表と型紙の裏表を合わせ、革の表側に外形を写し取ります。けがき針でも、ボールペンでも良いですが、ボールペンの場合は、失敗が許されません。

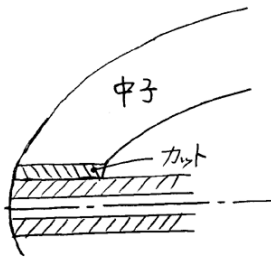
革包丁を使って切ります。刃がついている側を内側にして切って行きます。





革の下には、カッティングボードではなく、雑誌類をおいて切った方が刃の傷みは少なくなります。

革の裏に、センターライン、溝のラインをけがき、定規にグルーバーを当てながら、溝を掘ります。ベルトループ部にも曲げやすいように溝を掘ります。溝は、革の端まで突き抜けないよう、途中で止めておきます。



中子を切っていきます。シースにたまった水を抜く、水抜き穴は、シースの见えない側にあけても良いですが、中子に細工して見えなくする方法もあります。

図のように、中子の先端を数mmカットしておくくと、水抜きになります。

革の染色

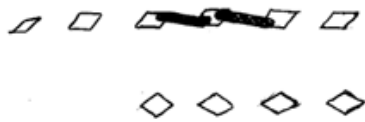
革を染めます。染料を水で10倍以上に薄め、水にさっと浸して引き上げた革に塗っていきます。少し乾いたら重ね、これを20回くらい繰り返します。濃い染料を一度に塗ると、色むらができます。



乾くと色は薄くなりますが、最後にミンクオイルを擦り込むと、再び濃くなります。

縫い

まず、ベルトループから縫います。ベルトループ部の溝に水をつけて柔らかくしてから、曲げ、接着箇所を決めて、その表革を少しはがしておきます。カッターナイフを直角に当てて、こすり取ります。エバークリップを両面に指で塗って、5分程度乾燥させ、貼り合わせます。ステッチレットで穴の位置を決め、菱目きりで穴をあけていきます。革が2枚しか重なっていないので、強めにあげれば、手だけで十分です。



菱目は、図の上のように向けます。下のようになると、穴の間隔が小さくなり、糸で縫っていくときにつながってしまうことがあります。

糸の長さを決め、針に通します。8の字を描くように両側から縫っていきます。縫いはじめと縫い終わりは、2目ずつ戻しておきます。

次に外周です。中子は、片側ずつ接着すると失敗がありません。革と中子の片側に、接着剤を指で塗って、5分程度乾燥させ、貼り合わせます。中子のもう一方も同じように貼り合わせます。

外周から6mmないし8mm入ったところに印を付け、ステッチレットで、穴の位置を決めてから、菱目きりで穴をあけていきます。

手であけてから、ボール盤につけた菱目きりで穴を広げます。

縫い糸の長さを決め、針に通します。糸の長さは、中子のあるタイプで縫う箇所の長さの7倍とします。一目ずつ、穴の両側から針を通して縫っていきませんが、表から通し、次に裏から通すときに、最初に通っている糸の上か下か、右か左かどこを通すかを決めておくと、縫い目が揃ってきれいに仕上がります。両側から一回糸を通す度にしっかりと引き締めます。糸は、縫いはじめを2回戻ったところからはじめ、縫い終わりも同じように2回戻します。

縫い終わったら、縫い目を木槌で叩いて、菱目を閉じます。

ウェットフォーミング

シースを水につけて、柔らかくし、ナイフを差し込み、形を整えます。ブレードとヒルトとの段差の部分など、きっちり押さえておきます。ナイフを取り出したら、乾燥機に入れて乾かします。

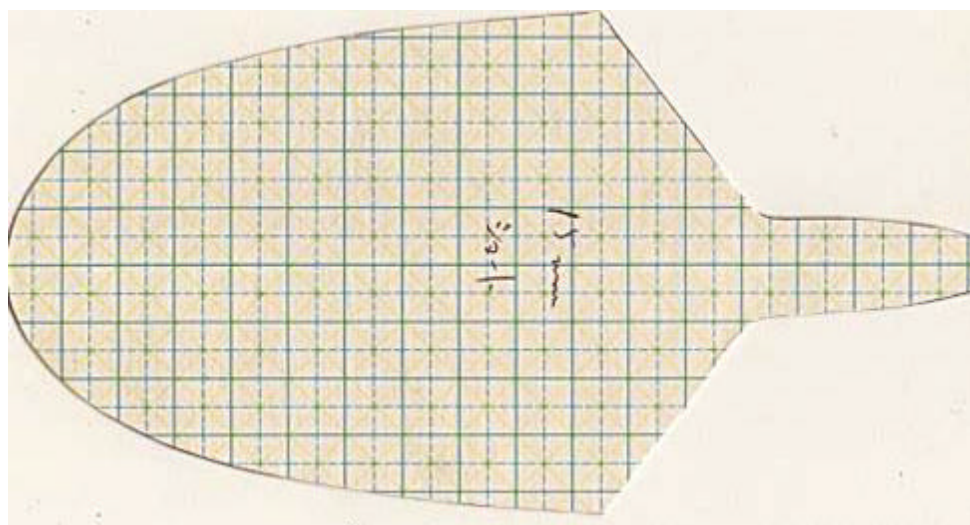
コバは、#60のペーパーで荒削りしたあと、#240のペーパーにトリポリ(茶色)をつけて仕上げます。トリポリは革を焦がさないためですが、半乾きの時にやれば、トリポリは要りません。

コバには、濃いめの染料を綿棒で塗ると、引き締まって見えます。

コバが半乾きの時に、木切れを押しつけて磨くと、艶がでて、目がなめらかになります。

シースが完全に乾いてから、ミンクオイルを擦り込みます。

4 . 袋シースの作り方

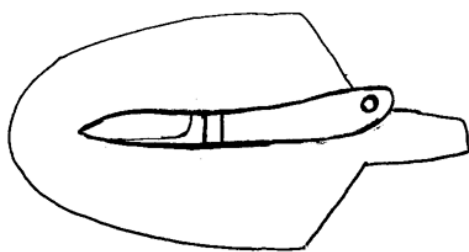


作る順序は、ラブレスポーチタイプと同様です。ここでは、特に違うところだけを解説します。

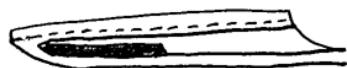
上の型紙が基本です。ナイフの大きさに合わせて、数種類持っていれば簡単に応用ができます。ベルト通しにぶら下げるためのナスカンは、普通サイズで15mm、大きくても18mmのものがいいでしょう。

革の厚みは、3mmが標準ですが、部分中子を入れれば、2mmでも十分に強度が出て、作りやすいので、こちらを勧めます。

部分中子は、図のようにブレードの形に合わせて、シースと同程度の厚みの革を貼り付けます。



3mmの革で中子を入れると、角が曲げにくいので、中子の外側に、彫刻刀で浅く溝を掘っておきます。



縫い糸の長さは、袋シースの場合、縫う箇所の高さの6倍です。

型紙、革切り抜き、染色、ナスカンの固定が終わったら、シースを水につけて柔らかくし、ナイフを中子の位置に合わせて、革を巻きつけ、グリップバイスでしっかり巻き込みます。



グリップバイスは、上のように2本使います。この後、手元を合わせるようにして、グリップバイスを平行にして、縫い目になるところを真っ直ぐにします。

型どりが終わった後、乾燥させ、手縫いパンチで穴をあけて、縫います。

コバの仕上げが終わったら、縫い目の反対側に板を当て、ヒルト部の段差をグリップバイスで押さえておきます。